

減っているブラックバス、増えているブルーギル

現在、大きな問題となっているブラックバスは大正14年に、ブルーギルは昭和35年に日本へ移入されたものですが、霞ヶ浦、北浦ではブラックバスは昭和50年に、ブルーギルは昭和55年に、初めて確認されたと一般にはされています。これらの外来魚は、他の魚や魚の卵稚仔を捕食することから、在来の魚類への影響が憂慮されていますが、霞ヶ浦、北浦での調査例でも、ブラックバスでは胃内容物中の約16%がエビ、残りはハゼ類などの魚類が約83%と、両者が大部分を占めていました。

ブルーギルについても、胃内容物中の約56%がエビ、残りの約41%がハゼ類などの魚類でした。

しかし、ブルーギルについては一般的に雑食性といわれており、その時期に多く存在する餌料を摂餌すると考えられています。実際、今年の5～6月におけるブルーギルの胃の中が、動物プランクトンやユスリカなどで一杯であった例もあります。

これらの外来魚が、霞ヶ浦、北浦でどのくらい生息しているのか試算してみました。

図1は、平成4～6年の霞ヶ浦、北浦における、ブラックバスとブルーギルの推定現存量を示したものです。

これによるとこの3年間では、霞ヶ浦、北浦ともにブラックバスは減少傾向にあり、ブルーギルは逆に増加傾向が著しい様子が見え、はっきりと認められています。

平成7年の漁獲量の統計値が発表されていないため、この図には平成7年の推定現存量は示していませんが、平成7年には、ブルーギルの占める割合は、更に大きくなっているものと推測されます。

図2は平成4～7年における、霞ヶ浦（古渡）と北浦（山田）の張網で漁獲された、ブラックバスとブルーギルの「1カ統当たりの年平均漁獲量」を示したものです。

「1カ統当たりの年平均漁獲量」は、その水域のブラックバスやブルーギルの現存量の水準を表しています。

この図でもブラックバスは霞ヶ浦、北浦ともに減少傾向にありますが、特に霞ヶ浦が目立っています。

一方、ブルーギルは平成6年から、霞ヶ浦、北浦ともに急激に増加しており、この傾向は平成8年も続くものと思われ、他の魚類の生産量が低下している現在では、無視できない状況となってきています。

ブラックバスやブルーギルが、このように大量増殖した原因は、親魚が卵や生まれた稚仔魚を守る習性があること、霞ヶ浦、北浦の魚類生産量が、この時期減少傾向にあったことなどによるものではないかと考えています。

特に最近増えているブルーギルについては、魚がたぐさんいた時には入り込む余地がありませんでしたが、他の魚類が減ってきた（「かわら版」なげ、漁獲量は減ったか1～9参照）ことから、それらの魚が占めていた所を、代わりに住み家とするようになって数を増やし、次第に従前の魚を脅かすようになってきたものと思われれます。

ブラックバスやブルーギルの退治は、まずは漁獲等によって取り上げること、そして同時に他の魚類を増やすことが、最も効果的ではないかと思われれます。

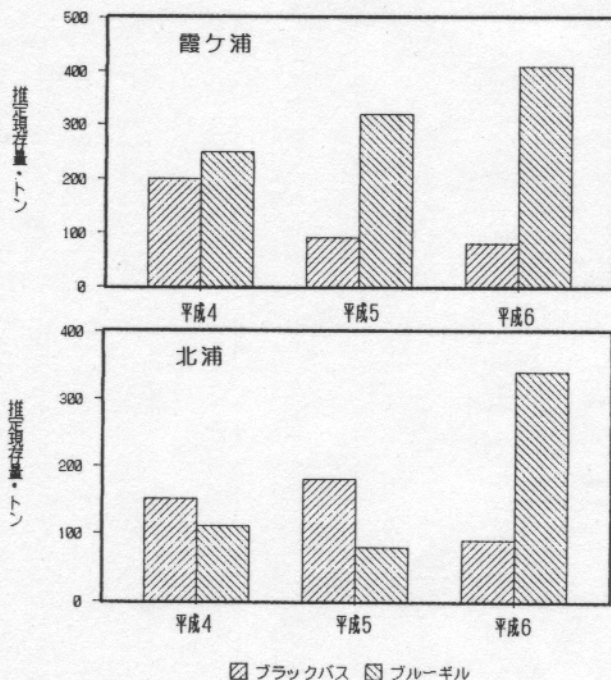


図1 ブラックバス、ブルーギルの推定現存量

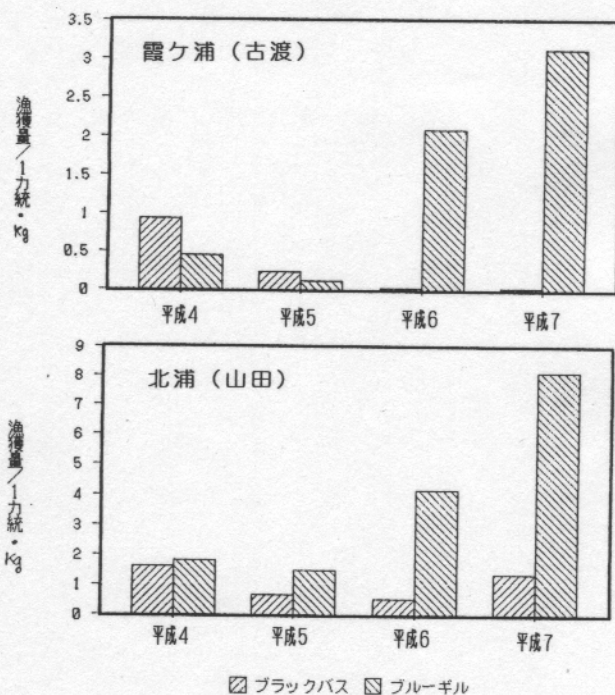


図2 ブラックバス、ブルーギルの「1カ統当たりの年平均漁獲量」(張網)